

蝶。炎のように

旅人さんた

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、職場のトップである天真爛漫な若き堂主、胡桃に仕事の同行を求められた。

最初は普段通り、妄想力豊かな依頼主の要望をかなえるだけの楽しい仕事かと思っていたが…

胡桃メインのお話です！他の璃月キャラも少しだけ出てきます。

※原神のメインストーリーー璃月編、胡桃の伝説任務、鍾離の伝説任務？のネタバレを含みます。

璃月のリアル感を重視したいと思ってます！

小説投稿は初めてです。

目次

序章	1
不信。煙のように湧く	3
陽光。簾のように隠す	5
断章。仙人の苦悩	7
仙人。狂犬のように迫る	9
冥夜。光は眠り、闇は誘う	11
望み。叶うこと少なく	14
愚行。償いは果たせず	18
平穩。異常の中に生ずる	20
接敵。消耗は止まらず	22
焦燥。休息は取れず	25
悪霊。凡人に囁く	27
悪霊。凡人に囁く 二	29
秘境。只人の挑戦	31
秘境。只人の挑戦 璃月の防人達	33
冥蝶。炎のように舞う	36
岩食。	39
往生堂にて。※前書き必読	41

序章

「あちゃーこれはちよつとまずいね。」

「世間の人は知ったように、本当に怖いのは幽霊なんかより人間だ！
なーんて言うけど、

それは本当の霊を知らない愚か者（しあわせもの）だよ。」

茶化すように、彼女は言った。

……荒れた廃屋だった。

いかにも出そう！という雰囲気のせいか、胡桃はうんざりしていた。

おそらく彼女にとって、こういういかにもな場所に連れてかれる方がよっぽど退屈なのだろう。

依頼人のほとんどは自分に霊だの魔神だのが取り憑いたと騒ぐだけ騒ぐ、妄想力豊かなお客さん鴨だ。

人間、特に心が弱いものは舞台さえ整ってしまえば普段は考えもつかないような狂気に陥ってしまうものである。

なので、彼女の仕事は葬儀屋というより、カウンセラーのような仕事のほうが多かった。

とはいえ仕事は仕事。往生堂77代目堂主は今日も退屈で平凡で、そして平和な作業にその梅の花のような目をまっすぐ向けて……

いるようなふりをし、依頼人を満足させるつもりだった。

「ねえー君ー明日暇あー？」

職場に出向くと、堂主は職員に片っ端から声をかけていた。

どうやら依頼に同行するはずだった人に急な用事が出来てしまったようだ。といっても、珍しいことでもない。

堂主がその人に用事をすっばかされるといふ事態は、濡れた琉璃袋を目にするような頻度で起こる。

その人のことはあまり知らない。巷では「先生」と呼ばれているが普段の様子からはそのような威厳は感じ取れなく、それに

この前の魔神が襲ってきたと噂されている事件以降、姿をあまり見ない。

なんでも隣国のモンドの端にあるという、中に入ったが最後まで怪物を刈りつくさないと解放されず、あの神の目所持者をもつてしても、複数人でかからないと帰ってこれないとされる「島」に連れまわされているのだとか。

しばらくすると、堂主の求愛の順番は自分にも回ってきた。仕事の誘い

「ねえ君は… 暇だよね！」

にやつと彼女は笑う。どうやらスケジュールは把握されていたらしい。否定はできなさそうだ。

「じゃ、決まりだね。明日の7時に不卜廬で待ち合わせ！」

はあ、本当は私もめんどくさいんだけど、なんでも鍾離先生の知り合いからの頼み事らしくてさー。

一人で行くつもりだったけど、鍾離先生が私のこと心配だっていうから、仕方ないね！」

心配……というのはおそらく彼女の身を案じてのものではないだろう。今の璃月において、彼女を危険な目に合わせられる事態などそうそうない。

自分自身彼女の實力を把握しているわけではないが、噂によるとあの璃月七星並だという。それに、例の「島」に出向いたことさえあるらしい。

自分の役割は、仲介人…… いや翻訳係と荷物持ちといったところだ。

要は子守である。

不信。煙のように湧く

朝七時…… あさしちじ？あの時はさらっと流してしまったが出勤時間としてはいささか早朝に過ぎる気がする。するが、すでに約束してしまった。あの堂主のことだ、特に何も考えず、その場のノリで決めたのだろう。

今日のうちに荷物をまとめておかなければ。渡されたメモを確認する。

書かれているのはまずお弁当とココナッツミルクだった。ココナッツミルクに関しては、あの薬屋の娘のご機嫌取りだろう。

他には花と羽、時計に杯に冠を用意しろと…… 意味不明だ。どう考えても説明が足りない。大方儀式をそれっぽく見せるための小道具だろう。

ちやうど知り合いの張順が幸福を呼ぶアイテムだとか言つて上記の物を売っていた気がするのでそこで調達しよう。全部で1万モラ。迷信グッズに払うにはなかなか腹の痛くなるお値段だ。

「お、ようーなんだ？お使いか？」

「ほう往生堂の堂主にねえ。それは本当にこの品で合つてんのか？こんなものじゃ全部揃つてもせいぜい金運が上がるくらいだぞ？それこそ、火魔女の方が……」

呆れた男だ。友人に対してもセールストークを仕掛けてくるとは。それとも本気で言っているのか。

はつきり言つて自分は迷信を信じてない。もちろん、往生堂で働き始めた頃は一体どんな心霊体験ができるのかとワクワクしたものだ、その実態がほとんどカウンセリングでは信じろという方が難しいだろう。

実際、一番死に近い職業の葬儀屋ですらこれなのだ。

張順は南十字の元メンバーと聞く。船乗りならば心を鎮めるために幸運のグッズなどに縋ることもあるだろう。悪いことだとは思わないが押し付けられないで欲しい。

「いやまああんなもの俺が売つてるわけないんだが…… それこそ

往生堂の本部になら揃ってるんじゃないか？稲妻で集めたしめ縄なら一応ここにもあるけど。」

無視して商品を受け取る。第一魔女なんて不吉な名前が付いたものなど、お守りにもなりやしない。

「まあお前がそれでいいって言わないだけだよ。あ、そうだから持ってけよ。俺が死兆星号に乗ってた頃北斗姐さんがくれたものだ。」

そう言っただけ渡されたのは千岩軍の礼服についてるような羽と日時計だった。一体どうして海賊の首領が千岩軍の装備を持ってるかについては……聞くだけ野暮だろう。

渋々受け取ったそれを無造作にカバンに突っ込み、弁当の用意をしに向かう。

そういえば、例の水質汚染の件は片がついたのだろうか。確かあれは花初という名の女性の自殺が原因だった。というのが千岩軍の結論だった。

世間に名前は公表されていないが、彼女の葬儀を担当したのはうちのので多少は世間より情報がある。

それと、堂主が気になることがあると言って調査をしてたはずだ。

確か婚約相手の鑑秋という数学教師がまだ見つかっていないとか……。

まあそんなことより重要なのは水質が戻ったのかどうかだ。

あそこで取れるハスの花托でできた盛世太平は、かなりの絶品なのだから。

陽光。簾のように隠す

不卜廬に着いても、あの薬採り娘は居なかった。堂主の落胆ぶりはものすごかったが、璃月港を出るころにはすっかり機嫌は治った。

「いやー今日みたいな日に限って天気が悪いなんて……ついてないねー」

そういえばまだ行き先を聞いていなかった。近場だとありがたいが……

「ん？無妄の丘だよ？帰れるのは明後日くらいになるかもね！」

……そんな気はしていた。丸々2日はかかる距離だ。望舒旅館に泊まることになる。まああそこの食事はなかなかのものなので悪い気はしないが。

「それに、『彼』にも用があるしねー。あ、杏仁豆腐を用意しとかなないと！」

にしても、かなり疲れる。望舒旅館への最短で行くには、璃月北門からの道が一番なのだが、ここは珉林ほどではないにせよ、山岳地帯だ。大荷物をもって坂道を上るのはなかなかのものだ。

もう少し行けば小休止できる場所があったはずだ。そこまでの辛抱、黙って歩こう。

何も持たない堂主に腹は立つが、彼女には帰離原での仕事がある。今体力を消耗してもらうわけにはいかない。

休憩は30分ほど。本来は1時間ほど休憩するつもりではあった。すぐ発ったのは長く居座ると長く居座るだけ離れるのが難しくなっていくものだから。と言いたいが、実際の理由は違う。

人がいなかったのだ。別に空いていたわけではない。本来いるべき口の悪い出店の婆や、若いころの惚気がうるさい爺、千岩軍の気配がない。

それにまだ十時だというのに薄暗いのも気になった。もともとここは崖に囲まれているので、陽があたりにくい場所ではあったが、そ

れにしてもである。しかし七天神像の輝きに陰りはない。

その事実に関心しながらも、やはり見慣れた場所の異常には不安を隠せない。

堂主はというと、

「んー『霧』が残っているのかねーもう十分時間は経ったはずなんだけど」

堂主の能天気さには今は感謝しつつ、本来千岩軍が警備している場所を横目に帰離原へと向かう。

あそこも十分危ない場所ではあるが、得体のしれない恐怖ではない分ここよりかはましだろう。一人であれば絶対に通らない場所ではあるが、今は堂主がついてる。

とはいえ危険は危険。境界線である小橋を過ぎたら用心しないと
な…… そう考えるころには先ほどの不穏な雰囲気は消え、陽がよく見えるようになっていた。やはり光はいいものだ。浴びるだけで元気になるってくる。

堂主も

「さーってこっからは私の出番だね！」

と元気な様子。頼もしい限りだ。この分だと日の入りまでには望舒旅館に到着するだろう。

しかし、安心は油断を生むものである。

陽の傾きが通常より早いことに二人は気付いていなかった

断章。仙人の苦悩

夜叉は珍しく困惑していた。ありえないものを見た……。というよりあり得るとは思っていたが、有ってほしくないものを見たからだ。

全身の傷が痛む。かの魔神の脅威は再も蘇るのか。それとも深淵より出る瘴気のせいかな。

塵王魔神の死後廃墟であつたため、一応の警戒はしていたつもりではあつたが、まさか数時間であそこまで暗雲が広がるとは思いもしなかった。帰離原。過去に栄えた古の都。かつての民は今の璃月港に移住したが、怨念までは消しきれなかったというのか。

しかし、あの帰終という塵の魔神はあのような怨念を残すような者ではなかつたはず。

とすると帰離原の異常は罫か。それも完全に我を欺くための物。一刻も早く岩王帝君に伝えたいが、望舒旅館を離れるわけにはいかない。璃月まで使いを出そう。

今はまだ大っぴらに活動しないほうがいい。意志あるものが元凶なのは明らかだ。それがなんであれ、見つけ次第速攻で潰す。死者であれ生者であれ、人と人とのいさかいに手を出すつもりは毛頭ない。しかし、人ならざる者の所業なら容赦はしない。岩帝の恩に報いるため、降魔大聖は彼を夜叉たらしめる仙力を行使する。まずは望舒旅館に忍び寄る魔を排除しよう。

「靖妖儺舞」

仮面を被り、体を燃やし、槍を振るう。

そうして夜叉は望舒旅館の頂上から地へ降りる。降下の傷はない。そんなもの、とうの昔に消し去っている。

速く、早く、疾く。我の代わりにこの場所を守るものが現れるまでは、槍を振るう手を止めることはない。

その地に着いた途端。不可視の呪いが体を覆う。

「なんだ……。これは魔神の！乗っ取られる前にせめて……」

時既に遅し。夜叉はその使命への忠実さを敵に利用されることになる。

ここまで夜叉の行動は事実が夜叉本人の想定通りであれば間違っていないかった。最適解といえる行動をしたと評価できた。

唯一にして一番大きな間違いは最初の当てが間違っていたこと。

魔人の残滓、アビスの瘴気。そこに意志が生じることが通常ありえない。気付くべきだったのだ。なぜわざわざ黒幕が望舒旅館から帰離原へ、瘴気の幕を張り、璃月港と帰離原の間の七天神像の付近を覆ったのか。

しかし、まあ、今では魔獣や宝盗団はびこる帰離原。古の民が移住した道。その腰を休めた山岳地帯。

このいかにも何かがありそうな場所に注意をひかれるのは、無理もないことではある。

火のない所に煙は立たぬ。実際見当違いというわけでもない。

だが、事を大きく見すぎた。人を超えた存在は、時折ことを大げさにとらえてしまうことがある。人間は、憎むべき者達を害するためだけに、時に神すら欺くことができるということを、人間と交流の少ない彼には理解できなかったようだ。

そして黒幕も黒幕だ。彼、または彼女は、人を超える者を欺くというところが、人の身では対処しきれない事態を引き起こすということを知らなかった。

悲劇とは、勘違いから幕を開けるということを、各人は知っておくべきなのだ。

仙人。狂犬のように迫る

「死つてさ、そんなに悲しいものなのかなー？誰にでも平等に訪れるんだから、怖がる必要なんてないのにねー」

死に多く触れすぎて、感覚が麻痺してるのだろう。と思った。

だれもが堂主のような死生感を持ち合わせていたら、そも我々のような職業はいらなくなるのではないか？

「まあでも一つ……自分を自分と認識されないままこの世から消え去るのは悲しいね」

よかった。こんなちゃらんぽらんな堂主にも悲しいことがあるのだと安心する。

こんな会話も、時と場合によつては洒落にならないものとなる。

普段は盗賊に溢れる場所。

それゆえに重要な文化財を守るのも一苦労だと言われる場所。

かつてこの国で一番栄えた場所。

帰離原は、酷い有様だった。

むせかえるような死臭、骸をつつくカラス……

人間と丘々人が重なるように積まれている。まるで貴様らの命の価値に差異などないと言わんばかりに。

照りつける陽の光だけがこの場で希望と呼べる物だった。

そして、このような所業を行える者は概して人間を超える力を持った者である。そう、たとえば、仙人のような。

「靖妖儺舞」

それは死を告げる呪文のように聞こえた。鬼の面を被りし少年はこの場に生者が在ることを許さないとでもいうように、我が身を打ち滅ぼさんと襲ってくる。

獣の様に襲い掛かる仙人に対するは一匹の蝶。

「散ー」

堂主は炎を纏う、一瞬顔を歪ませた様な気がするが、難なく仙人の一撃を防ぎ切った。

「あれえー？仙人、だよな？うーんあなたはそんなものに吞まれるよ

うな人じゃないと思ってたけどなー。でもざーんねーん私の大事な部下には指一本触れさせませーん！」

互いの槍が一方は障気を纏い、一方は火炎を纏いながら、ぶつかり合う。

仙人は目にも止まらぬ速さで、まるで砲弾の様に突撃するが堂主はその身を一時蝶に変え、そのことごとくを回避する。

「我は降魔大聖の名を授かりし者。汝ら望舒旅館へと立ち入らんとするなら、その灯火は断ち消えん。」

「聞いてませーん！はーいつ。いつてらっしやーい。」

間の抜けた様な掛け声と同時に、あたり一面は灰燼に帰した。

「どうする？これ以上続けたら、お互い内側からボロボロになっちゃうよ？」

「笑止。かのお方との約定を違えるくらいならば、この身朽ち果てようとも……くっ」

「血梅香はもうしこんでるよー！さあっていつ爆発するかはー私にもわかりませーん！」

仙人に付けられた印が燃え、体は崩れ落ちた。

驚きを隠せない。堂主がかなりの強者だということは知っていたが、まさかあの仙人を倒しうるとは

「そんなわけないよ。どう見ても正気じゃない。喋り方もおかしかつたし……普段の仙人と戦おうとしたら、冥蝶の舞一回じゃ全然足りない……」

そもそもそんな機会、来るはずないんだけど。」

「とにかく、望舒旅館に急ごう。なにかがおかしいよ」

そう言って仙人の体を抱え、堂主は歩き出した。

慌てて荷物を持ち、追いかける。

望舒旅館へと渡る橋についた頃には、陽はとっくに見えなくなっていた。

夜が訪れようとしている。生きる者と死した者の立場を逆転させる様な、そんな暗闇が、望舒旅館を包もうとしていた……

冥夜。光は眠り、闇は誘う

周囲の被害に比べて望舒旅館一帯は何もなかったかのようだった。
だった。

おそらくこの仙人が狂気にのまれながらも守っていたのだろう。
いいや、望舒旅館を守るといふ感情に介入されたのだから当然か。
「これなら中の人々に大事はなさそうだね。」

堂主はそう言つて胸をなでおろした。

緊張がほどける。これまで異常続きだったから、心身ともに疲労していたのだ。

「とりあえず状況を聞こう、対策はそのあと。鍾離先生に伝わってる
といいね」

昇降盤は稼働してないので、歩いてオーナーのヴェル・ゴレットの
もとへ向かった。

望舒旅館に避難した人で満ち溢れていたが、盗賊面料理人、言笑の
おかげで混乱状態にはなっていなかったようだ。

とはいえ、彼らからは急に魔物が普段近づくかない人里まで来たの
で、すぐに避難体制に入ったという情報しか得られなかった。

仙人が活動できないのに、望舒旅館は大丈夫なのか堂主に聞くと、
結果がはつてあるので心配はないとのこと。おそらく仙人が自分に
異常があることを察し、最後に残された理性で仙術を行使したのだろ
う。

「二晩ここで休んだ後、無妄の丘に向かう。君はここで休んでいて
いいよ。」

と言われたが、自分は荷物持ちで来たとはいえ、自分より年下の女
の子だけ危険な場所に向かわせて休んでいるほうが心に悪いのでつ
いていくと言ひ張った。

「うーん。まあ私一人で戦うとなると、消耗戦にしかないから、あ
りがたいといえはありがたいんだけど……」

望舒旅館の人と話し合った結果、本当に危険な状況になったとき
は、転移装置なるものを使って逃げることを確約し、ついていくこと

になった。それは登録してある望舒旅館になら、即座に転移できるもので、ある旅人が残していったものらしい。

話はまとまった。今日は早く寝よう。明日は何が起こるかわからない。本当は璃月七星に伝えるべきだが、伝書鳩も軒並み使えないらしい。ここは幸運にも守護する者がいたがほかの人里はどうなっているのか、考えるのも恐ろしい。

そうやって目をつぶって考えてるうちに、どっと眠気が襲ってきた。

夜は魔物の領域だ。ただの人間は瞼を閉じ、ただ朝日を待つとしよう……

とはいえ、夜を生業とする人もこの世には存在する。

例えば……特殊な力を持った葬儀屋などだ。

「往生堂」七十七代目堂主の座はただ人がいられるモノではない。

仙術はしかけた本人に意識がない状況では力が弱まってしまう。誰かが弱まった結界を抜けて侵入してきた魔物を退治しなければならない。

心配するヴェル・ゴレットを無視し、部下に持たせていた聖遺物を探す。

しかし見つかったのは想定していた燃え盛るような聖遺物ではなく、そこいらで売っているような、ちんけなものだった。

「あれー伝え忘れちゃったっけ？うーんこれはかなり困るなあ。神の目を使わなきゃ、上等の魔物と対峙できないかも……まあしょうがない。何もないよりはましだね。」

そう言つて、望舒旅館の外へ出る。胡桃の神の目の特性上、なんの補給もない場所での戦闘には不向きだが、ここにはかなりのたくわえがある。朝日が昇るまでなら存分に戦えるだろう。気が持てばの話だが。

「連戦は得意じゃはないんだけどなー。散ッ！」

冥蝶を身にまとい、葬儀屋は侵入者を狩る。

自分の命を削る、回復、削るを繰り返し、心をすり減らしなが

ら……

そしてそれを物陰から眺める影。

「どうにもやつかいだ。こちらに向かってくるようだし、対策が必要だな」

胡桃は霊に対して人一倍敏感だ。通常の彼女であれば、すぐに気付いたであろう。

しかし、今の胡桃には余裕がない。ここで見逃していなければ、事態はこれ以上悪化することがなかったのだ。

ということ、その影以外は気付くことはない。

望み。叶うこと少なく

「自分を自分と認識されないままこの世から消え去る」ことを恐れているらしい。

葬儀屋の望みは、単純で、平凡だ。

つまり、自分の親族に会いたいというもの。

霊が見えようが、話せようが、彼女にとってはどうといったことはない。

自分が最も会いたい人に会えない。彼女が抱えるものとは、つまりそんなよくある願いだった。彼女がこれまで吊ってきたいくつもの人間。これまでいくつもの人間。その最初の1人。周囲が彼女を認めるようになった第七十五代目堂主の葬式で、彼女はお爺さんに会うことはできなかったのだ。

正しく成仏できたのは喜ばしい。生と死の境界に踏み込み、成果として神の目を得られたのも心強い。

ただ、彼女は葬儀屋であり、ただの少女でもあるのだ。周囲が彼女を理解できないのは、彼女の行動故のことなので仕方がないが、そこに何の感情も抱いていないかは、本人すら知らないことだろう。

とはいえ最近、金髪の異郷人と仲良くしているとところを見かけるので、完全に孤独というわけでもないようだが。

「ふむ、相性がいいのは確かだ。だが任せておくべきではないな。人の所業は人が、神に連なるものは神が始末をつけるべきだ。」

そう言っ、誰も知らぬ客卿は立ち上がる。

ちなみに、路銀の用意は済んでない。

金持ちの娘は金持ちと結婚させたいのは親の、子を想う愛ではある。

ただし、愛というのは必ずしも相手に受け入れられるわけではないようだ。

多少は庶民のことを知っておかなくては、と様々な種類の子供が通う学校に入れたのが、間違いだったのかもしれない。結果として、少女はその学校に勤める、婚約済みの教師に恋をした。

その婚約相手もかなりの金持ちで、親はすでに亡くなってしまっていたが、その教師に恩があり、婚約をこぎつけられていたらしい。

相手の娘も教師のことを好いていたらしく、同時に、二人の娘は友人同士であった。片方は契約で結ばれた恋、片方は親に拒まれている恋。ここで教師が真に大人であったのなら、拒まれている娘をきっぱりと断り、素直に婚約相手と結婚するべきではあった。特にここは契約を重んずる国。婚約として例外ではない。

しかし、人の恋のなんと罪深いことか。拒まれていれば拒まれているほど、熱く燃え、惹かれるものである。そこに子供も大人も契約もなかった。

二人が結ばれる方法はただ一つ、この国から抜け出し、誰も追いつかない異郷の地で暮らすこと。熱く燃えた二人は、手段など選んでる余裕はなく、速攻で段取りを決め、やがて逃亡した。

だが、その駆け落ちは失敗に終わる。親が多額の金を千岩軍に払い、搜索依頼を出したのだ。実に、逃亡した次の日の朝に見つかってしまった。

二人は悟る、このしがらみから逃れられることは絶対に無いと。

業を煮やした娘の父は、教師と会うことを禁じた。

彼女は一晚中泣きじやくり、翌日、

「今日一日、彼と過ごさせてくれたら、もう二度と彼には会いません。」と懇願した。父親も悪気があつてのことではない。

一連の行動は、娘のことを真に愛しているからであり、泣きはらし

た顔の娘に多少の同情を覚え、それを許可した。

父親の口伝で、千岩軍の拘束から教師は解放された。娘の教師への愛は揺らぐことはなかったが、教師のほうはというと、今回の騒動にこり、別れる決心をしていた。千岩軍からことを伝えられた少女は、その場にうずくまった。

彼女の慟哭は、その場にいるものは事情が分からずとも、胸を締めつけるほどの悲痛なもので、その光景を見ていた友人であり、恋敵である。

少女は、一つの決心をする。

友のため、自分が身代わりになろうと。

友人は、少女に、

「今夜、私があなたの姿になりすまし、一晚を過ごす。その間に逃げてしまえ。

一晚あれば、目の届かない場所にも逃げられるだろう」と、伝えた。

少女は一瞬躊躇したが、彼とともにいられる喜びを思い、これに乗った。

手筈としては、この後、少女は親の元へ向かい、彼と別れてきた。せめて気が済むまで話しかけず、寝かせておいてくれと伝え、部屋に入る。

その後、窓から友人が部屋に入り、服を貸し、顔が見えないように毛布にくるまる。そして少女は家を窓から抜け出し、教師とともにこの国を抜け出すという、いかにも若き少女が思いつきそうな稚拙な手だった。

二人はその場を解散し、少女は計画通り、父親に伝え、部屋にこもった。

しかし、ここで少女の心に一抹の不安が生じる。本当にこの手でうまくいくのだろうか。すぐにばれ、見つかってしまうのだろうか。仮

に成功したとしても、たった一晩でそんなに遠くまで逃げ出せるのだろうか。

その不安は彼女に蛇のように絡みつき、心を縛り、どんどん思考を偏らせていった。

翌日、緋雲の丘で、一人の少女の遺体が発見される。遺体はかなり損傷しており、身元の特定は困難であった。しかし、数日のうちに辛うじて残っていた服の一部と、千岩軍の聞き込み調査から、恋の成就が叶わないと悟った徳安公の娘だと決定された。

愚行。償いは果たせず

こんな状況でも朝日は昇るのだと、一安心。これから死地へ赴くはずなのに、いまだに実感が沸かない。寝ぼけた調子で言笑が作つてくれた朝食を戴こうとするが、堂主はまだこない。また寝坊でもしているのだろうか。ヴェル・ゴレッドなら何か知ってるだろうか。

見晴らし台に向かつてみ……

なんだこれ

最初の感想はそれだけ。次に襲い掛かってきたのは自分への嫌悪。堂主は明らかに疲弊した様子で、ヴェル・ゴレッドから治療を受けていた。

「本当に大丈夫なの？」

「いやー。さすがに舐めすぎちゃったかなあ。普段本格的に戦闘つてなると、きちんとした準備をしてから向かうから、即席の装備でなーんて初めてだったよ！」

「傷自体はすぐに治せるけど、心の傷は簡単には癒えないの。もう少しここで休んでからにしようって部下くんにも言っておくからね。」

「え？」

「え？」

「心の傷なーんて全然大丈夫だよ？ 痛いのは好きじゃないけど、私はずももとその道のプロフェッショナルなんだから。体を一切動かさずに怨霊と戦ったことだって…… あったようななかったような……」

「本当に？ それならいいけど、まさか一晚中守ってくれていたなんて思わなかった。言ってくれれば、手伝えたのに。彼も起こすべきだったかしら。」

「うーん。あんまり一般人は、この手の話に関わらないほうがいいんだよねー。うちに就職する子は、そのあたりの覚悟はしてもらってるけど、彼はまだ入ったばかりだし、霊についてもまだ認識がふわふ

わーっしてゐるんじゃないかなあ？だから、私は寝てたってことにしておいてね？気を使われるのってだあーい嫌いだから。」

ここまで聞いて何も理解できないほど、自分は愚かじゃなかったらしい。

あいつが言っていた花だの羽だのがどーのこーのという話を、もう少し聞いておけばよかった。しかし、戦う上で重要なものだったらしい。

恐らく戦闘を行う上で、ある程度の補佐として機能するものなのだろう。あれがあれば、少しは傷も減ったのかもしれない。そう考えるだけで自分に虫唾が走る。

しかし、彼女は自分に黙っておけと言っていた。何も知らない体でいなくてはならない。とてもつらいが、これがせめてもの誠意だ。

そうして、食堂で待っていると、いつものように詩を口ずさみながら、軽快な足取りで

堂主がやってきた。

「あれえ？朝ごはん待っててくれたんだ。やつさしいねー。じゃ、食べよつか！」

何とかその場をやり過ごしたが、まともに食事が喉を通らないばかりか、目を見て話すこともできなかった。

平穩。異常の中に生ずる

ここから無妄の丘近くの軽策荘まで移動だ。

直線距離ではには無妄の丘のほうが近いが、あそこは険しい山岳地帯なので、一度軽策荘を経由する必要がある。途中の竹林で休めば、問題はないだろう。

道中は、想像より魔物の数が少なかった。こんな状況だ。最悪隠れながら進まなくてはならないかと危惧したが、人も、魔獣も、ファデュイの連中さえ、姿を見せなかった。

なんとか竹林までたどり着いた。例によつて、ここで一番注意しなければならぬイノシシも姿を見せない。すると、堂主がなにやら険しい顔をする。

「この先、何が起きてても不思議じゃないよ。」

何が起きてても。などと、あいまいな表現なのは本当に堂主ですら判断ができないのであろう。

この先、といつてもすぐそこは軽策荘だ。その軽策荘で、何が起きてても不思議じゃないとなると、そこにいる人たちは一体どうなっているのか。

石でできた階段を上がり、橋を渡ると、何やら人影があつた。

ファデュイだ。

ここで面倒なことが起きた時のためにとヴェル・ゴレツドが渡してくれたモラを用意する。ファデュイがいる場合、戦うことのできる人がいないときは、モラを渡するのが一番面倒ごとにならなくてすむやり方だ。堂主にかかればどうってことないだろうが、これ以上消耗してほしいくない。

と、袋に手をかけようとすると……

「ようこそ軽策荘へ！お疲れでしょう！どうぞこちらへ！」

鈍器で殴られたような感覚だった。

普段迷惑沙汰しか起こさない奴ら

氷銃を持ったファデュイ先遣隊は、にこやかな笑みでそう返してきたのである。

この怪しげな状況に、堂主はどう返すのかと思っていたところ……
「やー！元氣そうで何よりだよ！美味しいご飯はあるかな？」

格の違いを見せつけられた。流石。堂主は動じないらしい。

とはいえ異常は異常なのだ。だって、ここまで歩いた道中で、まだ何も食べてなかったのだから、腹が減るのは仕方がない。それを不思議と思うなど、断食主義にでも走ったつもりか？もてなしてくれるのであれば、ありがたく受け取ればいいではないか。

そう考えると、目の前で開かれているパーティーに参加する。そこは老若男女も悪人聖人も、明るく楽しく笑い合える場所。

重い荷物などさっさと捨てて、楽しく明るく元気に過ごそうではないか。

そうして堂主と共に、旅の疲れを癒した。武器も遺物も、人が扱う物だ。どんなに立派な牙があろうと、戦意がなくては意味がない。

異常は正常によって判断が付くもの。異常の中では異常が正常である。悦を選んだ。

人間、誰しも辛い道より楽しい道を選びたがる物なのだから。

接敵。消耗は止まらず

基本的に、胡桃の精神というものは安定している。彼女を真に知っている者なら、この評価に異議を唱えることないだろう。

彼女を理解できる者など、璃月にもそういない。

そもその話、神の目を保有している時点で並外れた感性や能力を持っているので、ある意味では例外ではないのだが。

生と死にあまりにも多く触れている胡桃を惑わすことなんて本来あり得ないことなのだ。彼女は安寧を求める訳でもなく、闘争を求める訳でもない。求めるものは均衡。生者と死者のバランスを保つことが彼女の葬儀屋としての役割である。

一向の行為は、正常ではあったが、平穏ではなかった。

異常な状況で、平穏な行為をする。この、異常な事態では均衡など保たれるわけがない。

異常の中では、異常な行為を。平穏の中では平穏な行為を。

宴は進むが、瘴気の中だ。

彼女が正気に戻るのは時間の問題であった。

彼女は、彼女の潜在意識は、その不均衡を許さない。

或いは彼女の心に住む何者かによるものか。

別に彼女自身のみで気付くというわけでもなく、彼女の持つ武器によるものも大きい。彼女の持つ武器は己の迷いを打ち消す為、炎をくべることにより上位存在の加護を得たと「認識」するために行われるある儀式をもとに作られた、儀式的には杖に近いものだ。そんなものを全力でぶん回すのは、命に対して深い見解を持つ彼女だからこそできる技であろう。

つまり、彼女にとっての炎は己を燃やし、さらなる力を得るためのものであると言える。炎ある所であれば、冥蝶の導きにより彼女は常に自分を持つていられる。

彼女を惑わしたければ、この世から炎というものを一つ残らず消し去るべきだったのだ。

ただし、常軌を逸する者は、その莫大な力を得る代償に周りからの理解を得られないのである。

「そこっ！」

胡桃は立ち込めている謎の煙の発生源を潰した。

宴会の喧騒は止み、一時の静寂が訪れた。

皆己の状況に気が付いたのだろう。住民が騒ぎ出す。

「なぜ貴様らファデュイ共と宴などせねばならんのだ！」

「この国を破滅させるのに失敗したら、今度は洗脳ときたか！薄汚い連中め！」

そう、先の渦の魔神の一件いらい璃月人は一層ファデュイを嫌うようになった。そしてここにいる彼らは国だけでなく心までも支配しようとしたことに、激怒したのである。

「待て！そんな命令は受けていない！」

「我々の今回の任務は巡回。我々ファデュイの末端の監視だ！」

そんな弁解を聞き入れるわけもなく、場はかなり混乱してしまっている。

堂主にここは一時無視して無妄の丘を目指すか尋ねる。

「うーん、でも多分このままだと逆上したファデュイにここの人たちやられちゃうと思うよ。敵であることに間違いはないし、このまま倒してつちやつてもいいかなー。」

激闘。というほどでもないが、彼女は怒るファデュイを一人一人鎮めてていった。しかし、彼女はその特性ゆえ戦うとなるとどれだけ圧倒しているかが、消耗は免れない。

そして、敵は常に都合の悪い時に現れるものだ。胡桃たちは戦闘に夢中で、周りを魔物に囲まれていることに気付がなかった。

堂主に伝える。あのオーラからして、望舒旅館を囲んでいたやうな、魔神の残滓に取り憑かれた物達だ。

「本当に間が！悪い！奴ら！」

戦鬪を一時やめる胡桃とファデュイ。残り立っていたファデュイは一人だけ。

「おい！なんだよこれ！こんなモノ、報告されてないぞ！」

その場でうずくまるファデュイを無視し、胡桃は魔物と向き合った。

「装備も食料もそれほどは足りない。さっさと黒幕をたたかないと。」

焦燥。休息は取れず

誰の目から見ても、消耗してるのは明らかだった。特に、短い間とはいえ常に同行していた者は、今の胡桃に隙が多いのを見抜いていた。

丘々人の軍勢（まともな指揮官も、統率も取れてない集団を軍と言えるのかはともかく）は際限なく沸き、蝶を撃ち落とさんとしている。

彼女はどれほど敵に厄介がられているのか、亡者の怨念は凄まじいモノだった。なにせ、璃月の町一つを丸々使い罫を仕掛けられていたのだから。

しかし蝶の舞は乱れず、確実に敵を仕留める。驚くことはない、これまで何度も堂主の凄絶ぶりは見てきたのだ。

自分がこの戦いに加わり、助けになることはできないのはわかってる。だが、しかし、それでも目を離すことはできない。これは未熟さによるモノだ。

彼女の實力を信じ、自分は周囲の未だ混乱の最中にある住民達の避難誘導するのが役目。だがまだこれをできずにいる。

彼女の戦闘を何度か目にしてきたが、彼女が一度に倒せるのは小型丘々人最大三匹まで、それも突進技によるモノなので、かなりの体力を使うだろう。

“何故か”彼女のそれのみによる疲れは感じさせないが、最初の頃より回避行動が増えてきた気がする。

それに、彼女の戦闘には明らかにテンポがある。数秒、堂主は火を操れなくなるタイミングがある。その間に無力になるというわけではないが、明らかに火力が下がっている。

だめだ、不安がどうしても拭えない。不慮の事故により、致死の隙を敵に与えてしまったら……

だが、そうなったとしても自分では何もできない。悩んだ末、誘導を開始することにした。その前に、堂主の無事を確認する。

「ううん、ぜんぜん平気！私、追い詰められてからの方が本気出せ

るから。」

堂主の虚勢とも取れる言葉を聞き流し、誘導に向かう。

「ふう、やーつと楽にできる。堂主たるもの、みつともない姿は見せられないからね。」

「回復用の食糧と尽きてきたし、泥沼の戦いになりそうだけど、お化けでぶん殴ってこう！」

「でも、やっぱりもう少しまともな聖遺物を持ってくるんだったかな……」

朱色の花束

蝶導来世による冥蝶の舞状態の時、胡桃の重撃はスタミナを消費しない。

蝶導来世

燃え続ける炎のみが、この世の不浄を払うことができる。

一定のHPを消費して、周囲の敵をノックバックし、冥蝶の舞状態に入る。

安神秘法

灼熱の魂を振り回し、広範囲に炎元素ダメージを与える。

敵に命中した時、胡桃のHP上限を基準に自身のHPが回復する。この効果は命中した敵1体毎に発動され、最大で5体まで効果が発動する。

胡桃のHPが50%以下の時、より高いダメージと回復効果を持つ。

悪霊。凡人に囁く

「くツ、ここは……望舒旅館？　そうか、借りができてしまったな。」

「帝君には伝わっただろうか……今すぐにも彼女達を追わなくてはだが、……ダメだ、力が入らん。」

「お目覚めですか？　様！　今はこちらでお休みください。この部屋には人を立ち入らせませんので。」

「いや、いい。我は夜叉だ。人による施しを受け取るわけにはいかなぬ。」

「旅館の者に料理を用意させます。動くのはそれを召し上がった後も

……」

「だが……」

「そう意地を張るモノでもない。人のいざこざに口を出すこともないが、これは神の不慮により起こったことだ。俺が手を貸す言い訳としては十分だろう。」

「施しを受けた後、ついてこい。」

どうやら夜叉の疲れを癒すのはその男の言葉で十分らしい。

避難誘導はあらかた済んだ。敵は堂主を優先したのか、住民を襲うことはしなかった。そうだ、千岩軍を呼ばなくては。今からでも間に合うはずで……

「遅い。そして甘いね。何もせずにモブのまままでいたなら、見逃してあげたのに。」

どこからか声が聞こえる。敵のものだ。

「あなたの堂主の命、風前の灯だよ。助けなくていいの？」

挑発だ。今は堪えなくては。

「ふーん。まあいいけどさ、いつまでそんなままにいるつもり？」

「あなたにも、できることはあるんじゃない？」

……虚空を殴る。決意は変わらない。自分は戦力にならない。千岩軍を呼ぶのは間違っていない。

「だから遅いつて！まああの堂主の命を見捨ててまでこの場を収めた
いならば、正しい判断かもしれないけど。」

……こいつの正体は割れている。璃月での失踪事件。そこで、世間
に知られず、身代わりに殺されてしまった被害者の霊。

ただ、その程度の除霊など、往生堂にはいくらでも前例がある。

「流石は往生堂。でもその感じじや、私程度の小娘がこんな事件を起
こせる理由まではわからないようだね。」

そう、そんな哀れな霊の力の源は、本来優しかったはずの魔神の残
滓。塩の魔神　ヘウリア

かつて魔神戦争で追い込まれ、領民（通説ではモラクス）によつて
殺さ

れたとされる、魔神だった。

「水つて、どんな姿にも形を変えられるよね、どこぞの精霊じゃないけ
どさ。」

「知ってる？遠い稲妻でも、水と霊の親和性は高いんだつてよ。」

「魔神とあの堂主との関係は知らない。そもそもこの魔神と関係して
るのか、もしかしたら、その奥にある人物に関係してるのか。」

「何にせよ私はそんなこと興味ない。たまたま海に流れたら、使えそ
うな力が残つてた。それだけ。」

悪霊。凡人に囁く 二

この悪霊の目的は、復讐だろうか。

「それもあるけど、正直魔神の残滓により大分拡大されてるみたい。

あんな個人を殺したところで気は治らないかな。……というより鎮まらないかも。」

「私を忘れた璃月そのもの、まずは璃月港だね。そこに住む人々に私の存在を刻みつける。」

「ろくに調べもせずに、真実が分かっても隠したままにいる奴らを許さない。」

この結論は往生堂独自の調査によるものだ。他の人には知られていない。

「それでも、だよ。ただの葬儀屋にわかることすら彼らは知らないんだから。」

「それが終わったら……どうしようか、他の国にでも攻め入ろうか？ ちやうど今、隣国のモンドは戦力が常時の半分くらいらしいし。水があるところなら、塩の魔神のちからはつかえる。塩の彫像もそのうち作れるようになるんじゃないかな。」

そんなこと、七星が許すはずがない。

「ははっ、二度も魔神の襲撃を受けておいて、まだ認識がなってないようだね。璃月七星？ 仙人？ そんなもので、死者の軍勢は防げない。」

死者の……軍勢？

「あなたのとこの堂主はよく知ってるんじゃない？ 璃月には沢山の成仏してない霊が地上に残っている。」

「霊体同士はよく馴染む。私と塩の魔神のように。この憎悪を増幅させれば、霊を操る……ことはできなくても、人を恨むようにするくらいならできる。本当はもう少しで、あの夜叉も憎悪に浸けることができるんだけどね。」

でも、この国には……

「岩神は死んだ！ 二代目もなぜか現れない！ 今の璃月では、三度目の襲撃は防げない！」

「そう考えると、あの堂主を先に殺しておくのは英断だったかもね。彼女ほど霊に強く出れるモノはいないだろうし。前見た時はもう少し強かった気はするけど、どうしたんだろう。」

……まさか

「心当たりがあるようだね。武器は揃っていた。あの感じだと適当な聖遺物でも持たされた？まあしょうがない、常人にはわからないよね、アレの存在意義なんて。私だって生きてた頃は、おまじない程度のものだと思ってたよ。それも、一人の少女の恋すら叶えられない程度のね。」

魔女の炎……

「君は運がいいね！ちょうど、その魔女の炎が長らく残っていたのはこの地らしいよ。もしかしたら無妄の丘に、まだ力は残っているかも。」

自分の……せいで……

「挽回の機会は目の前！よかったね。」

……行かなくては。彼女を死なせる訳にはいかない。

「ソレは冒険者の中で『秘境』と恐れられるものの試練を踏破したものにのみ与えられる！奇跡は求める人にのみ、与えられるものだよ！」

走り出す。彼女を助けるためなら、なんだってやってやる。

「さて、片割れは死亡つと。もう用はないや。結界だけ貼り直して、璃月を殺しに行こう。」

秘境。只人の挑戦

彼女は常に自分は死を恐れないと言っていたが、今ならわかる。

それは彼女なりの優しさだったのかもしれない。生き死について見識のある人間が恐れていたら、見識のない人間は死後に対して必要以上に恐怖してしまう。という、優しさ。

本当のところはわからない。だが、自分はそう解釈した。

一度呼吸を整える。気がつくところは見えたこともない場だった。

青い場所。不気味な場所。そして目の前にある異様な物体。

「門」。

自分の丈の倍以上はある、大きな門。迷っている暇はない。後ろを振り向くとすぐそこに魔神の残滓に侵された者が追ってきている。少し躊躇いながらもその門の中へと足を踏み入れた。

何もない場所だった。一際目立つ、枯れた木を除いて。

そこでふと、友人の話を思い出した。なんでもこの世界には秘境と呼ばれる、一流冒険者でも攻略はむずかしく、見事攻略した暁には強大な力を持った魔具を得ることができると。

縋るしかない。

瞬間、腹の底まで響く重苦しい音が響き渡った。どうやら始まるらしい。呼吸が荒くなる。

そしてそこで……

自分の思い上がりを実感した。

突如現れ、襲ってきた二つの炎。数秒遅れでそれが大きなスライムだと気付く。とはいえ、気付いたところでどうしようも無い。慌てて元来た道に戻ろうとしても、不可視の壁に遮られる。すぐに方向を変え、部屋の隅に走るが、二体のスライムは苦痛による叫びにも似た炎を撒き散らし、自分を抹殺しようとしてにじり寄ってくる。

そこには刈るものと刈られるものしかないなかった。

数回普段の自分なら致命傷足りうる攻撃を受けたが、興奮状態なのか気に止めるほどではなかった。

数分逃げ回っていると、ある時から部屋の壁にある、崩れた部分に目が付くようになった。あそこまでうまくのぼり、スライムを誘導して落下させられないかと。

普段なら絶対思いつかないような作戦だったが、ここで悩んでいる暇はない。迷いなく壁に近寄り、己の全てを使ってよじ登る。

示し合わせたかのように、崩れた壁の残骸が散らかっていたおかげで、目標に到達できた。スライムは今尚襲ってくる。タイミングが命だ。失敗は死を意味する。

それも自分だけの死ではない。

極限状態において、人は実力以上の能力を引き出せるというのは本当だったらしい。スライム2体は攻撃の反動を抑えきれず、地の底まで落ちていった。

恐怖と疲労が一気におそいかかってきた。

しかしそれは勝者にのみ許された嗜好。存分に味わい尽くした後、枯れた木に目をやる。あとはあれに祈りをささげるだけ。

そしてその希望に歩み寄ろうとした瞬間。

目の前に写っていたものは、二体の巨大な丘々人の影だった。

どうやら奇跡（まぐれ）は、許されていないらしい。

秘境。只人の挑戦 璃月の防人達

これから始まるのは狩りですらない。目の前にある無抵抗な虫を潰すような、そんな、ありふれたこと。

でも、まさか自分が味わうことになるとは。

すでに瀕死級のダメージを負いながらも、未だに動けることが不思議な体も、何の役にもたたない。こういう場合、只人ができることはただ一つ。祈るだけ。どうか彼女が無事で有りますように。もはやこの国に祈るような神はいないが、この広いテイワットのどこかの神には届いて欲しいものだ。

振り下ろされる巨大な斧。初めて味わう死の感触は、どのようなものだろう。祈りはもはや懇願へと変わった。璃月の人なら知っている。誰であれ、死は避けられない。

あの岩神でさえも……ならば、
せめて一瞬で終わってくれ。と

消えゆく意識の中、二つの声を聞いた。

「堅如盤石！」「靖妖儺舞」

「敵の浅慮だな。只人の勇氣に感銘を受ける神がいることを知らなかったとは。」

「誇れ、璃月を守る人。例え、悪の囁きによる蛮勇であろうと、その勇氣を持つものがこの地に何人いるか……」

く璃月某所く

「あなたがこの事件の大元ね。凝光の頼みとはいえ、何で私がこの程度の小物を……と思ったけど、なるほど。当然の判断。」

あなた達、糸は、自分が引いてると思っただけ、どこに繋がっているかはわからないものなのよ。」

「繋がった先が私でよかったわね。」

く珉林、人里く

「ここ一帯の妖魔は退治した、か。そなたがいて助かったぞ。甘雨。」
「敵の排除も仕事の一つなので。それにしても港の方は大丈夫でしょう。か。刻晴さんと連絡を取らなくては。」

「僕の体質があっても、妖魔がよってくるなんて。一体どこから湧いているのだろう。」

く璃月港く

「えーっと戸籍情報の管理の法をもう少し引き締めて……殺人と隠蔽と改竄の罪状……はいいとして、幽霊に対して罪を与えるかどうか……」

あくもう！こここのところ前例のない事件が多すぎる！

「はあ、やることがまだ残っているというのに、何て空気の読めない連中なのかしら。」

「仕方ないわ。本物の魔神ほどではないけれど、放っておける事態でもないのだから。要人は群玉閣に避難させている、全力で戦えるわ」
「凝光、あなたも要人でしよう……」

「うおおおお！最高のロックを聞きやがれ！にしても、あんたまで戦うのかい？」

「ロックをこの距離で聞けるのです。それに、劇の題材にもなりますしね。」

「わわ、グウオパー、なんかいつもより元気だね！こんな量の食材を前にしたら、気分上がるのはわかるけど！」

「重雲……どこに行ったんだ……このままじゃ大量の料理を僕一人で食べることにしそうだよ……」

「七七、戦う、先生は、行かない？」

「今回、あなたは相性がよろしくないようです。飲まれないように、私と共に不卜廬に籠城ですよ。」

「ふむ、この国は勇気ある人間に恵まれてるようだ。」

冥蝶。炎のように舞う

「はあ、はあ、流石に……もう、きつい……」

「???なら、もっと上手くやれてたのかな……」

「ふわあーあ、私の……番……なんてね……」

胡桃はもう、すでに力を使い果たしていた。胡桃の性質上、窮地に陥れば陥るほど力を増すとはいえ、強度まで高くなるわけではないのだ。

「せめて、雨さえ降ってくれば、もう少し戦いやすかったんだけど……」

「ちよつと、もう限界……かも」

「おじい……ちゃん……」

気がつくとき、そこは門の外だった。手には、燃えるように熱い聖遺物。誰かが倒したのか、それとも何かしらの奇跡が起きたのか。

最後に緑の閃光が見えていた気がするが……

試しに聖遺物を強く握ってみた。

特に何もない。持ち主として、自分は見た目られないようだ。

……真の持ち主は、他にいる。

手遅れになる前に、渡さなければ。

悪霊は、強度を高めるため、結界を強いものにのみ反応するよう変えていたらしい。それに阻まれたおかげで客卿と仙人は、この場を見つけることができたのだが。

森を駆け、坂を駆け、川を超える。

その先で……

蝶は、地に墮とされていた。

間に合わなかったのか……

いや、まだだ。今度こそ、彼女を信じると決めたのだ。

「堂主！これを！」

持っていた聖遺物をちからいっぱい投げつける。

言っていたではないか、追い詰められてからの方が本気を出せると。

なら、

きつと、

今が、

その時だ。

途端、胡桃の周りに金色の蝶が集う。

「散！」

まるで、ゆらめく炎のように、強く、優しく、そして、美しく

蝶は、蘇る。

その舞は、あたりの敵を薙ぎ払っていく。

これまで見ていたような戦いではない、まさに、圧倒的。

彼女のふるう杖に触れた瞬間、敵は消えていく。

その美しさに、目を奪われていると、どこからか、声が聞こえてきた。

「□○△！」

「――！」

「譁？ユ怜！」

よく聞き取れないが、その複数の声と共に、とたんに岩の建造物が生え、雨が降り出し、ものすごい風により敵が一箇所に集まっていた。

今度こそ、力尽きる。

あの輝きを見ていたいが、体の方が限界らしい。

最後に目に映ったのは、間拔けな掛け声と共に儀式杖を振り回し、敵を薙ぎ払う、堂主らしい姿だった。

・冥蝶の抱擁

胡桃のHPが25%以下、または戦闘不能に至るダメージを受けた時に発動：

このダメージで胡桃が戦闘不能になることはない。また、次の10秒間、胡桃の全元素耐性及び物理耐性+200%、会心率+100%、中断耐性大幅アップ。

この効果は胡桃のHPが1の時に自動で発動される。

60秒毎に1回のみ発動可能。

岩食。

「貴様が元凶だな。大人しく結界の中にいるべきだったものを。」

「あんたは、往生堂の」

「鍾離だ。これ以上、璃月への狼藉はやめてもらいたい。」

「あんたのことはよく知らないけど、邪魔をするなら容赦はしない。」

悪霊は、半分以上塩の魔神の能力を扱っていた。

いつでも目の前の男を塩の彫像に変えられる。

「貴様は魔神の力を使う時に、魔神と契約を交わしたな。それはなんだ。」

「知れたこと、塩の魔神を殺したモラクスへの復讐として、奴の愛した璃月港を滅ぼすことだ。」

「抜いたのか、封印の剣を。」

「ああ、そうだ。恐ろしいほどの力を感じた。その力をただで乗っ取るほど、馬鹿ではない。もし契約を結べば、こちらが乗っ取られることもない。魔神でさえ、璃月で契約を反故にすることはできないからな。」

「なるほど、まずそこが間違いだったな。」

「知ったような口を！凡人風情が！」

「凡人、なるほど凡人か。」

「ああそうだ！そのような粗末な神の目の模造品で、騙されると思うたか！」

「そんなに凡人を憎むのか。」

「そうだ！苦しみを知らず、悲しみを知らず、勝手に無かったことにした貴様ら凡人が憎い！今も璃月では才人によって凡人が守られているのだろう！全てを過ぎたものとし、自分とは関係ないと言って、無視するのであろう！」

「そうだな、確かに、彼らは事件の真相について、追及しようとはしなかった。そこには保身もあったかもしれない。だとしてもこのようなことを許すわけにはいかないな。」

「ではどうしろと！何も残さず、身代わりに殺された私は！何もせず

に消えろというのか！」

「璃月には、民を守る幽霊だっている。自分と同じ悲劇が起きぬよう、貴様もそうなればよかったのだ。」

「勝手なこと言うな！あんた、貴様！人の心をなんだと……」

「そうか、凡人と呼ばれ喜んだが、やはり只人になるのは難しいらしい。作法は完璧なはずだが、心からただの人間になるのに一体どれほどかかることやら。」

「まさか……」

「先程述べていた一方的な契約だが、もし塩の魔神を殺したのが岩神では無かったら、その契約は矛盾するな。」

「岩王……帝……」

「貴様も璃月に住んでいたのなら、岩神が何に重きをおくか知っているはずだ。」

「や……め……」

「悠久の苦しみこそ、貴様の罰にふさわしい。」
「て……」

「貴様を、岩食いの刑に処す。」

「ふう、なんとかこじつけられたな。」

「あの霊がもしオセルなどと契約を交わしたとしたら、一大事だった。」

「そうならないように、あえて黙って契約に乗じてくれたのだろう。俺に依頼を出したのも、お前だったのか。」

「感謝するぞ。璃月を愛する同士よ。」

往生堂にて。 ※前書き必読

例の騒動から数日間続いた治療が、ようやく終わった。やっと仕事に復帰できる。不思議と胸は弾んだ。

あのあと、堂主と自分は例の旅人に助けられたらしい。

隣国では龍災を払い、ここ璃月の危機を何度も救い、稲妻の開国に一役買ったと言われる伝説の旅人だ。

そんな大物に救われるとは、なかなかの幸運なのだろう。

しかし、自分はそのことを気にするほど心に余裕はなかった。

堂主と過ごした数日間。皆が軽んじている堂主の本質を、自分は知れたのだ。

……白状しよう、多少の優越感があつた。そして、彼女の理解者となった自分は、彼女へ恩を一生かけて返したいとも思っていた。

彼女への思いを言い表すのは難しい。

たった一つ、確かなものがあるとしたら、あの日見た炎の輝きを、一生忘れることはないということだ。

往生堂の前に着き、さつきまで浮かれていた気持ちが一気に引き締まった。別に、少なくとも今は、思いを告げようとするわけでもないのに、何を緊張してると言うのか。

聞いたところ、

恐る恐るドアを開けたが、彼女は不在らしい。

ほっとしたような、がっかりしたような。

彼女の天真爛漫な姿を見れるのを期待していたというのに。

聞いたところ、客卿と共に営業をしてるらしい。

相変わらずだ。成功するとは思えないが、気長に待とう。

いや、せっかくだから彼女の好きな料理でも買ってこよう。

確か、エビ蒸し餃子だったか。

と、思っていたら急に扉が開かれた。堂主の帰還だ。普段、彼女は勢いよく扉を開けるので、すぐに堂主だとわかるのだが、どうやら様子がおかしい。

「そんなことを言ったところで、仕方がないだろう。」

「そんなことわかってるよ、鍾離先生。」

「層岩巨淵の調査のために一時的に戻ってきただけ、そもそも一点に留まらないのが旅人というものだ。」

「そーいえば、鍾離先生も行つてたよね？」

「まあ、放っておくわけにもいかないからな。」

「旅人を？」

「全員だ。」

話題は例の旅人らしい。まあ確かに活躍ぶりは凄まじい。数日前までは、自分も旅人の噂を聞くのは、帝君の話の次に気に入っていた。「おつ！回復した？傷が残ってないようで、何よりだよ。」

堂主が自分に語りかけてきた。少しの喜びを感じつつ、言葉を返した。

「私？私は、まあ、慣れてるからね。」

「俺が同行すべきはずだったのに、代わってもらったあげく、あのような事態に巻き込んで申し訳なかった。そして、よく頑張ってくれたな。」

堂主からの心配も嬉しいが、鍾離先生から褒められるのも、不思議と悪い気分ではない。

そして、堂主の不調の原因を聞く。

「いや、不調と言うほどでもない。単に気になっていた人と会ったにもかかわらず、まともに話せず、落ち込んでいただけだ。」

「ちよつと！鍾離先生！変な言い方やめてよ！」

「ははっ別に間違ったことは言っていないだろう。稲妻への旅行休暇くらい、構わないぞ。」

堂主も、意外と旅人の話が好きらしい。

それも面識がある様子。堂主の凄さを再確認する。

「確か、旅人はびん婆やの壺に家を建てていたはず。そこでなら、会えるんじゃないか？」

「うん、そう……かな。そうだと……いいな」

最後の言葉が決定的だった。彼女の旅人への思いは、璃月人の大半が抱いてるものとは、別のものだったらしい。

生と死を深く知り、若くして往生堂の堂主を完璧に務める彼女の心は、とつくに支配されていたのだ。

あの旅人は、堂主のことを自分以上に理解しているのだろうか。

堂主はそんな簡単に、自分に見せてくれたような素の部分他人に明かすのだろうか。

いや、違う。

彼女に素などなかった。強いて言うなら、全てが素だったのだ。

だが、それを知るには遅すぎた。堂主と旅人がどれほど前に出会っていたのかは知らないが、きつとすぐにそのことに気付いたのだろう。

だからこそ、彼女の心を奪えたのだ。

あまりにも遅すぎる出会い。あまりにも遅すぎる想い。

敵、とも呼べない。あの旅人は自分のことを知らないのだから。

あの怨霊は、自分の心を殺して一度は親友に譲ったらしいが、自分にはそんなことはできそうにない。

いや、まさか自分が怨霊にはなるまいが、少しだけ同情してしまった。

死者に同情してはいけなさと何度も教わったが、それでも、だ。

数日後、一人の璃月人は自らの仕事を離れ、思いを忘れることを選んだ。